

# かたくり



第2号

2010年3月25日

福島大学  
行政政策学類  
塩谷教養演習  
編集・発行  
(隔月発行)

## 遊休農地再生事業（通称「Uプロ

### ジェクト」）始まる！

「かたくり創刊号」でお伝えしたように、大学と金谷川地区との連携・協働の一つとして、大学隣接遊休農地復活・再生事業（通称「Uプロジェクト」）が本格的に始まりました。二月から三月にかけての計三回の作業で、荒れ放題だった遊休農地は見違えるほどきれいになりました。本号では、その作業の様子をお伝えしたいと思います。

#### なぜ「Uプロジェクト」か？

大学隣接遊休農地復活・再生事業では、あまりに名称が長すぎて覚えにくいので、「Uプロジェクト」と通称することにしました。「遊休農地」の頭文字「遊」とUが同じ音という単純な理由が第一ですが、それだけでなく、「結（ゆい）」、「ユニバーシティ（大学）」、「Uターン」、「ユニゾン（調和・斉唱）」などいろいろな思いを込めています。

### ○ 第一回作業（二月一四日）

数日前に降った雪がまだ残り寒さが身にしみる二月一四日（日）の朝九時、今野順夫福島大学長、石川秀夫金谷川活性化委員会21会長、学生代表のあいさつから作業がスタートしました。

今回の作業には、バレンタインデーにもかかわらず、地域住民のかたと学生と合わせて四十名が参加してくれました。

午前中は地元の方々が草刈り機やチェーンソーを使って、人の背丈以上に伸びたススキやササ、フジツルなどを刈り取っていき、学生はその刈り取られた草木を数か所にまとめる作業を行いました。ある程度草木がたまったらそれらを燃やしていきましました。午前中はこれらの作業を繰り返してほぼ全範囲の草木を刈り取ることができました。

ここで作業を一旦中断して、昼食をとりました。昼食は地元の方々と女子学生が中心になってつくりました。メニューはおにぎりと豚汁と漬物です。身体が冷えて腹ペコになっていただけに、大満足の昼食でした。午後の作業は刈り取った残りの草木を燃やす作業を行いました。あちこちで火の手と煙が上がり、遊休農地は野戦場のような風景でしたが、第一回の作業で草木がほとんどなくなり、見晴らしはずいぶんよくなりました。



それぞれお話しを伺いました。

— この作業を迎えたご感想は？

石川会長 なんでもそうだと思うが、行動を起こさなければ何も起こらない。誰かが動けば、みんなが動いてくれ、それが大きな力となる。それを強く実感した。

— 今まで福島大学のことをどのよう思っていましたか？

会長 近くて遠い存在であると感じていた。

— これからは大学と地元がどのようにしていくべきでしょうか？

会長 大学と地元がお互いにもっと協力していくことが大事である。今は地元のお祭りなどの行事がある時に大学生にお手伝いを頼んだり、大学祭のときに出店などを出したりしているが、これよりもっと地元と大学の学生との交流を増やしていくべきである。そうすれば地域も活性化していくし、学生にもとてもいい刺激になると思う。

— この作業風景をみてのご感想は？

今野学長 地元の人の力はすごいなと実感した。学生もこれに学んでほしい。大学も微力ではあるが協力していきたい。

— 今後の大学と地元とのつながりについてどう思いますか？

学長 今までは大学と地元とではあまり交流などもなかったが、今回の作業を機にこれからは地元とのつながりを強化していきたい。地元の方々もとても期待してくださっているのでその期待を裏切らないようにしたい。

— 新聞社の方々もきていますが？

学長 マスコミが四社取材に来ている。今回の作業の注目度の高さに改めて驚く。

— 今回の作業に関連して、今日本が抱えている問題のひとつに食料自給率の低下がありますが、これを改善するためには？

学長 農地ないし公園などの自然を作っていくことが大事だと考える。今回の福島大学での試みが日本全国に広まってほしい。

### 第二回作業（二月二八日）

二月二八日（日）の午前九時から第二回目の整備作業を行いました。今回の参加者は三十人ほどで、あいにくの雨の中整備作業を行いました。今回は地元の方がたの協力の下、バックホー三台やチップパーなどの重機も使った作業になりました。前回行うことができなかった手前側のススキやササを刈り、それらを集めて燃やしました。また、重機を使って地盤をならしたり、木の枝を細かく砕いていたりしました。作業を始める前は草が生い茂っていた状態でしたが、一時間ほどで全体の見通しが良くなるまでに整備されました。刈り取る前には埋もれていた石碑が、周りの草やササが取り除かれたことで姿を現しました。その石碑には、はつきりとは読めないものの、「く有明の月」という和歌のような言葉が刻まれていました。地元の方の話では、松川にはそのような石碑がいくつかあるとのことでした。また、その石碑の近くには、以前、大学ができるまでは利用していた井戸枠が二つ見つかりました。そこから導水していた下の井戸も取り壊して埋め、お祀りしていた水神様は熊野神社に移しました。

休憩を挟んで、朝から降っていた雨もあがり、見通しが良くなるまでに整備された十一時頃、「福島大学隣接遊休農地整備作業安全祈願祭」と称して、黒沼神社の明石武重宮司による地鎮祭が行われました。四方に竹を立て、しめ縄を張り「聖域」を作り、中央に「ひもろぎ（神々が天から降臨し憑り付くところ）」を立てました。この儀式は、先ずお迎えした神さまに、この地区の今までのことと今のありさまを報告し、誰がどんな目的で何をどのようしようとしているのかを告げます。

そして、荒れた土地を整備することなので目的が滞る事無く果たせますように、かかわる人たちに怪我のないように、完成したらみんなでお礼と違うところに移っても今まで通り清く冷たい水を授けてくださいとお願いするものです。

※ミニインタビュー：今回の作業に当たって、石川会長と今野学長に

お昼休みをはさんで、午後の作業は四時まで続けました。今回の作業で、重機が一番奥まで入る道路が山際に作られました。また、前回残っていた手前のササ、ススキ、ヨシもきれいに刈り取られました。山から浸み出してくる水を逃がすための暗渠も一本掘りました。雨が降っていた中、多くの地域の方が重機を持ち寄ってまで集まって下さり、とてもスムーズに作業を行うことができました。地元の方たちのパワーはすごいなと改めて思いました。



## ○ 第三回作業（三月一三・一四日）

過去二回の作業で、ようやく以前あった農地の姿が見えてきましたが、まだまだ草や木の根が土深く入り込んだままです。すでに、緑の新芽がでているところもあり、植物の生命力の強さに驚かされます。農業とは自然との闘いだということを改めて感じさせられました。圃場は九枚ありますが、このままでは、畦畔の草刈りも大変でした。トラクターなども入りにくいということで、圃場を大きく二枚に統合することになりました。

第三回の作業では、バックホー一台とブルドーザー一台が登場して大活躍しました。重機が入ると危ないので今回は、地元から六名、大学から三名、計九名だけの「少数精鋭」といっても大学側はまったくの素人ですが」だけで作業をしました。

バックホーで根を掘り起こして畦畔を壊し、ブルドーザーで土を押し広げながら整地が進められました。尾形寅昭さんが運転するバックホーと渡辺昇一さんが運転するブルドーザーは、まるで自分の手足のように繊細かつ大胆な動きをします。残雪でぬかるんでいるという悪条件にもかかわらず、あつという間に作業が進み、プロの職人技には思わず見入ってしまいました。

一三日（土）の一日作業で、前回掘った暗渠に目詰まりがないように、もらってきたハチクを入れて土を被せ、上の四枚の圃場が一枚になりました。また、一四日（日）の半日作業では、下の五枚の圃場を一枚にまとめるとともに、新しく使わせていただけることになった道路際の農地の整備も行いました。



三回の作業によって、遊休農地の姿は一変し、旧四号から大学の建物が見通せるようになりました。道行く人も足を止めて、生まれ変わった農地を興味深そうに眺めています。ただ、農地として使うにはまだ作業が残っています。土が乾いてからトラクターによって耕運し、また、山から浸み出してくる水の対策をとる必要があるそうです。それができれば、春から農作業に入り、うまくいけば、今年中に農作物の収穫までいくことができそうです。

当初は三年計画で少しずつ整備していくつもりだったことからすれば、格段の進捗です。これもひとえに、近所の底力ならぬ地元の底力があったからこそだと思います。大学からは重機の賃借料などはお支払いしましたが、重機の運転をはじめとするすべての作業はまったくのボランティアでご協力いただきました。そればかりか、昼食やジュースなども提供していただき、地元にも「おんぶにだっこ」という状態で、感謝の言葉もありません。それは裏返せば、大学に対する地元の大きな期待の表れなのだろうと思います。その期待に反しないように、この農地を交流の場、学びの場として、発展させていくつもりです。紙面を借りて、石川秀夫会長、菊地吉徳事務局長をはじめとする活性化委員会の皆さま、金谷川地区住民の皆さまにあらためて御礼申し上げます。とともに、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

## お知らせ

瓦版『かたくり』では、金谷川地区と大学との交流を進めるために、互いの行事やイベントを掲載していきたいと思っております。お祭り、運動会、コンサート、講演会、サークルの活動などなんでも結構ですので、情報をお知らせいただければ幸いです。また、『かたくり』に対するご意見・ご要望もぜひお寄せください。連絡先は福島大学塩谷研究室 (TEL&FAX: 548-8328 MAIL: shioya@ads.fukushima-u.ac.jp) です。よろしくお願いたします。なお、本号の編集は、塩谷教養演習一年生の日向野宏美、桑原啓太、永山喬之、朝倉里美、鈴木沙織、畠山陽介が担当しました。